

記憶画にみる感染症

～はしかとパラチフス～

新型コロナウイルスの感染拡大に際し、感染症を対象とした歴史研究や史資料が改めて注目されています。諸沢地区出身の会沢忠（1904～1986）は、人生経験を回想して絵と文章に記録した記憶画を制作しました。今回はその中から感染症を描いた作品をご紹介します。

会沢は1915年頃、10歳の時に「はしか」にかかりました（図1）。現在のように麻疹ワクチンが普及する前は、はしかは乳幼児の死亡の重要な原因のひとつでしたが、普通に見られる病気のため、軽視されることもありました（山内一也『はしかの脅威と驚異』岩波書店、2017）。会沢の父親も「はしかに薬など必要ない」と言ったため、母は旅僧に頼んで祈祷してもらい、子どもの枕元で回復を祈りました。1928年には勤務先の日立鉾山でパラチフスにかかっています（図2）。会沢は駕籠に横たえられ、白衣にマスク、ゲートル履きの男性2人に伝染病治療院へ運ばれています。後ろには日立鉾山の煙突、工場と住宅が見えます。当時の日立市域は農業色の濃い茨城県の中で、日立鉾山や日立製作所など近代産業が発展する町として、県内他市町村や他府県の労働者が移入し人口が急増しました。一方で都市整備が追いつかず、赤痢や結核、腸チフス・パラチフスなど、感染症が多発しました（鉾山の歴史を記録す



▲図1：はしかにかかって祈祷を受ける



清水ゆかり氏

近現代部会専門調査員
(農研機構研究員)

る市民の会編『鉾山と市民』日立市、1988）。会沢の記憶画からは、公衆衛生や医学が現在のように発達する以前には、感染症が身近なものであったことが読み取れます。

会沢は記憶画の制作を通して、現代社会を築くまでの地域社会の歴史を次世代へ伝えようとしてきました。小冊子『古稀の素人が画く明治、大正、昭和の思い出』（自費出版、1974）と色紙96枚（1983・1984制作、常陸大宮市歴史民俗資料館山方館蔵）には、個人史に留まらず、明治～昭和の農業・農村や就業経験、戦後の社会変化などが絵と文章で記録されています。

常陸大宮市の「記憶遺産」と呼ぶべき貴重な資料です。『常陸大宮市史研究』第3号で詳しくご紹介しましたので、どうぞご覧ください。



▲図2：パラチフスに感染し伝染病治療院へ

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）